

授業計画書

基本情報	科目名称	解剖学Ⅱa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年（前期）	2年	4	80（40）
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	渡邊 利明					渡邊 利明

教科書	『解剖学』南江堂
参考文献・資料等	「解剖学ワークブック」医歯薬出版株式会社

授業の方法及び内容	1年次の講義と同じように内臓系や神経系に関して初学の生徒が多いため、専門用語や三次元的な構造などを覚えてもらうことを心がけ、この学習分野の面白さを知ってもらうことで学習意欲を高めていく。
到達目標	基礎知識として内臓系、神経系の名称や働きを身につけてもらい、同時期に習得する教科の基礎学力を築いてもらう。
準備学習の内容	内臓系や神経系は苦手意識を持つ生徒が多いため、興味を持ってもらえるよう様々なトピックスを提供し、それにまつわる書籍等を紹介し知識を増やしてもらう。
授業期間全体を通じた授業の進め方	2年目で学習に慣れてきていると想定されるため個人での学習の習慣を見に付けてもらいながら進めていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	消化器：口腔、食道
2	消化器：腸、肝臓、膵臓
3	呼吸器：鼻腔、咽頭、喉頭
4	呼吸器：気管、肺
5	泌尿器：腎臓、尿管
6	泌尿器：膀胱、尿道
7	男性生殖器：精囊、精管
8	男性生殖器：陰茎、陰囊
9	女性生殖器：卵巣、子宮
10	女性生殖器：膣、外陰部、胎盤
11	内分泌器：下垂体、甲状腺
12	内分泌器：上皮小体、副腎、膵臓
13	内分泌器：精巣、卵巣
14	神経の基礎
15	神経組織
16	硬膜と脳脊髄液
17	脳：終脳、間脳
18	脳：中脳、小脳
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	解剖学Ⅱb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年（後期）	2年	(4)	80 (40)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	渡邊 利明					渡邊 利明

教科書	『解剖学』南江堂
参考文献・資料等	「解剖学ワークブック」医歯薬出版株式会社

授業の方法及び内容	1年次の講義と同じように内臓系や神経系に関して初学の生徒が多いため、専門用語や三次元的な構造などを覚えてもらうことを心がけ、この学習分野の面白さを知ってもらうことで学習意欲を高めていく。
到達目標	基礎知識として内臓系、神経系の名称や働きを身につけてもらい、同時期に習得する教科の基礎学力を築いてもらう。
準備学習の内容	内臓系や神経系は苦手意識を持つ生徒が多いため、興味を持ってもらえるよう様々なトピックスを提供し、それにまつわる書籍等を紹介し知識を増やしてもらう。
授業期間全体を通じた授業の進め方	2年目で学習に慣れてきていると想定されるため個人での学習の習慣を見に付けてもらいながら進めていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	脊髄：区分
2	脊髄：伝導路
3	脳神経：嗅神経～外転神経
4	脳神経：顔面神経～舌下神経
5	脊髄神経：神経後枝～胸神経
6	脊髄神経：腰神経叢～デルマトーム
7	自律神経系
8	感覚器：皮膚、筋、腱の感覚神経
9	感覚器：眼球、副眼器
10	感覚器：聴覚器
11	感覚器：味覚器、嗅覚器
12	体表解剖：区分、骨格系
13	体表解剖：筋系、脈管系
14	体表解剖：神経系
15	体表解剖：外皮、生体計測
16	映像解剖
17	復習
18	復習
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生理学Ⅱa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年（前期）	2年	4	80（40）
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	山 美喜子					山 美喜子

教科書	『生理学』南江堂
参考文献・資料等	人体の正常構造と機能 日本医事新報社 病気がみえる

授業の方法及び内容	臓器器官の構造、働きについて解説し、国家試験形式の演習を行う。
到達目標	上記項目の柔道整復師にとっての重要性を理解すると同時に、国家試験の出題傾向を把握する。
準備学習の内容	授業と関連した内容の事前課題の取り組み。
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎授業ごとに理解度の確認のための小テストを行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	6 内分泌 腎臓 膵臓 血糖値の調節
2	7 生殖 性分化 男性生殖器
3	7 生殖 女性生殖器①
4	7 生殖 女性生殖器②
5	8 血液 血漿タンパクの種類と働き
6	8 血液 イオンの種類と働き 血液細胞 (種類と働き)
7	8 血液 血液凝固と線維素溶解
8	8 血液 血液型 免疫 免疫担当細胞 (種類と働き)
9	8 血液 免疫 抗体 (種類と働き)
10	9 血液 まとめ
11	9 骨の生理 骨の構造 骨の成長 (形成)
12	9 骨の生理 骨の形成と吸収 関与するビタミンとホルモン 10 循環 心筋 (特徴と種類)
13	10 循環 刺激 (興奮) 伝導系
14	10 循環 心周期
15	10 循環 心電図 血管系 (種類と働き)
16	10 循環 血圧の調節①
17	10 循環 血圧の調節②
18	10 循環 リンパ循環系 まとめ
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生理学Ⅱb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年（後期）	2年	(4)	80(40)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	山 美喜子					山 美喜子

教科書	『生理学』南江堂 改訂第4版
参考文献・資料等	人体の正常構造と機能 日本医事新報社 病気がみえる

授業の方法及び内容	臓器器官の構造、働きについて解説し、国家試験形式の演習を行う。
到達目標	上記項目の柔道整復師にとっての重要性を理解すると同時に、国家試験の出題傾向を把握する。
準備学習の内容	授業と関連した内容の事前課題の取り組み。
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎授業ごとに理解度の確認のための小テストを行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	11 呼吸の生理 呼吸器の構造 換気の仕組み 呼吸運動
2	11 呼吸の生理 肺でのガス交換 残気量と換気量
3	11 呼吸の生理 コンプライアンスとサーファクタント
4	11 呼吸の調節 酸素解離曲線 呼吸の調節
5	12 尿の生成と排泄 ネフロン構成成分 糸球体のろ過
6	12 尿の生成と排泄 尿細管での再吸収①
7	12 尿の生成と排泄 尿細管での再吸収 尿細管の分泌
8	12 尿の生成と排泄 腎血流量 クリアランス 排尿と蓄尿
9	13 栄養と代謝 栄養素(糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラル)
10	13 栄養と代謝 ATPの合成 エネルギー代謝
11	14 消化と吸収 消化器系の構造 消化、吸収とは、口腔(唾液の成分と働き、嚥下)
12	14 消化と吸収 胃(構造、胃液の成分と働き、分泌調節)
13	14 消化と吸収 小腸での消化と吸収①
14	14 消化と吸収 小腸での消化と吸収② 栄養素ごとの吸収
15	14 消化と吸収 まとめ
16	15 体温とその調節 体温の変動 熱産生 熱放散
17	15 体温とその調節 体温調節の仕組み 発熱
18	16 高齢者の生理学的特徴 17 発育と発達および競技者の生理学的特徴・変化
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	一般臨床医学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期	2年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	渡邊 利明					渡邊 利明

教科書	『一般臨床医学』 医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	講義を中心として一般臨床医学の実践(実習)をも含み進行させる。
到達目標	1) テキストに記載される重要基礎用語である「太字用語」説明できる。 2) 柔道整復師国家試験出題基準の内容を消化し、簡単に説明できる。
準備学習の内容	1) 前回提示されたテキスト内容を読み内容を把握する。 2) 指示されたノートの書式を形成する。(講義内容を右頁へ、復習内容を左頁へ記載する。)
授業期間全体を通じた授業の進め方	1) 小テスト、中間テスト、期末テストによる評価を前提とし、ノートを重要視する。 2) カルテの記載方法に関連して、目前にある疾患を想定して学問を進める。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点~80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点~70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点~60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点~0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	ガイダンス 診察概論
2	診察各論 問診 視診 視診の意義と方法～皮膚の状態
3	診察各論 視診 頭部
4	診察各論 視診 顔面の視診～四肢の視診
5	診察各論 打診
6	診察各論 聴診
7	診察各論 触診
8	診察各論 血圧測定法実習
9	診察各論 生命徴候 1
10	診察各論 生命徴候 2
11	中間試験
12	診察各論 知覚検査
13	診察各論 反射検査 1
14	診察各論 反射検査 2
15	診察各論 代表的な臨床症状 1
16	診察各論 代表的な臨床症状 2
17	検査法
18	演習
19	期末試験解説
20	期末解説

授業計画書

基本情報	科目名称	一般臨床医学Ⅱ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	後期	2年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	渡邊 利明					渡邊 利明

教科書	『一般臨床医学』 医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	講義を中心として一般臨床医学の実践(実習)をも含み進行させる。
到達目標	1) テキストに記載される重要基礎用語である「太字用語」説明できる。 2) 柔道整復師国家試験出題基準の内容を消化し、簡単に説明できる。
準備学習の内容	1) 前回提示されたテキスト内容を読み内容を把握する。 2) 指示されたノートの書式を形成する。(講義内容を右頁へ、復習内容を左頁へ記載する。)
授業期間全体を通じた授業の進め方	1) 小テスト、中間テスト、期末テストによる評価を前提とし、ノートを重要視する。 2) カルテの記載方法に関連して、目前にある疾患を想定して学問を進める。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点~80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点~70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点~60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点~0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	呼吸器疾患 1
2	呼吸器疾患 2
3	循環器疾患 1
4	循環器疾患 2
5	消化器疾患 (消化管)
6	消化器疾患 (胆・膵・腹膜疾患)
7	代謝栄養疾患
8	内分泌疾患 (前半)
9	内分泌疾患 (後半)
10	血液・造血器疾患
11	中間試験
12	腎・尿路疾患
13	神経疾患 1
14	神経疾患 2
15	感染症・性感染症
16	リウマチ疾患・アレルギー疾患
17	免疫不全症 環境要因による疾患
18	演習
19	期末試験解説
20	期末解説

授業計画書

基本情報	科目名称	外科学概論 a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期	2年	3	60 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	柳澤 雅弘					柳澤 雅弘

教科書	『外科学概論』 南江堂
参考文献・資料等	毎回、配布資料を配ります。

授業の方法及び内容	柔道整復師として患者の疾患を治療できるようになるために、外科学の基礎的知識も必要であるため、外科学の基礎知識を習得する。
到達目標	1. 骨折や脱臼の状態から、外科的な疾患として内臓や血管、神経、筋肉の損傷が推定できるようになる。 2. 外科的な疾患名を聞いて、その疾患がどのようなものか言えるようになる。
準備学習の内容	解剖
授業期間全体を通じた授業の進め方	配布資料を配り、パワーポイントを使って説明します。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	損傷	教科書 P5～22
2	炎症	教科書 P23～32
3	腫瘍	教科書 P33～49
4	子宮頸癌、前立腺癌、皮膚癌	
5	肺癌、胃癌、大腸癌	
6	ショック	教科書 P51～55
7	輸血、輸液	教科書 P57～71
8	消毒と滅菌	教科書 P73～75
9	手術	教科書 P77～84
10	麻酔	教科書 P85～94
11	移植と免疫	教科書 P95～100
12	アレルギー性疾患	
13	出血と止血	教科書 P101～111
14	心肺蘇生法	教科書 P113～120
15	脳神経外科疾患－1	教科書 P123～137
16	脳神経外科疾患－2	教科書 P137～140
17	末梢神経疾患	
18	甲状腺・頸部疾患	教科書 P141～143
19	期末試験	
20	試験解説	

授業計画書

基本情報	科目名称	外科学概論 b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	後期 (前半)	2 年	(3)	60 (20)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	柳澤 雅弘					柳澤 雅弘

教科書	『外科学概論』 南江堂
参考文献・資料等	毎回、配布資料を配ります。

授業の方法及び内容	柔道整復師として患者の疾患を治療できるようになるために、外科学の基礎的知識も必要であるため、外科学の基礎知識を習得する。
到達目標	1. 骨折や脱臼の状態から、外科的な疾患として内臓や血管、神経、筋肉の損傷が推定できるようになる。 2. 外科的な疾患名を聞いて、その疾患がどのようなものか言えるようになる。
準備学習の内容	解剖
授業期間全体を通じた授業の進め方	配布資料を配り、パワーポイントを使って説明します。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	胸壁・呼吸器疾患	教科書 P145～158
2	心臓疾患—1	教科書 P159～167
3	心臓疾患—2	教科書 P167～169
4	脈管疾患	教科書 P169～176
5	乳腺疾患	教科書 P177～184
6	腹部外科疾患—1	教科書 P185～214
7	腹部外科疾患—2	教科書 P214～227
8	腹部外科疾患—3	腹部画像
9	期末試験	
10	試験解説	

授業計画書

基本情報	科目名称	整形外科学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期	2年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	柳澤 雅弘					柳澤 雅弘

教科書	『整形外科学』 南江堂
参考文献・資料等	パワーポイント及び資料

授業の方法及び内容	柔道整復師として患者の疾患を治療できるようになるために、整形外科学の診断・治療に必要な基礎的知識を習得するとともに、それに必要な技術を身につける。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 患者の症状から骨の損傷の程度、関節の脱臼の有無が診断できる。 2. 同時に合併症としての神経の障害の有無が診断できる。 3. さらにこの時、血管の損傷についても診断できる。
準備学習の内容	骨、神経、血管の解剖
授業期間全体を通じた授業の進め方	配布資料を配り、パワーポイントを使って説明します。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	整形外科とは、骨、関節の基礎知識	教科書 P 1~8
2	筋・靭帯・腱の基礎知識 運動器の科学	教科書 P 8~14
3	整形外科診察法	教科書 P 15~21
4	整形外科検査法	教科書 P 23~40
5	整形外科治療法	教科書 P 41~54
6	骨・関節損傷総論	教科書 P 55~71
7	スポーツ整形外科総論、感染性疾患、骨腫瘍	教科書 P 73~97
8	軟部腫瘍 非感染性軟部・骨関節疾患 全身性の骨・軟部疾患	教科書 P 97~126
9	骨端症 四肢循環障害	教科書 P 126~135
10	神経・筋疾患、脊髄腫瘍 脊髄損傷	教科書 P 136~148
11	身体部位別各論 頸部	教科書 P 149~157
12	胸部、腰部	教科書 P 158~169
13	肩関節・肩甲帯	教科書 P 170~187
14	上腕・肘関節 前腕	教科書 P 188~204
15	手関節 手・手指	教科書 P 204~215
16	骨盤・股関節	教科書 P 216~230
17	大腿・膝関節	教科書 P 230~246
18	下腿・足関節 足・足趾	教科書 P 246~264
19	期末試験	
20	試験解説	

授業計画書

基本情報	科目名称	病理学概論 a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期 (後半)	2年	3	60 (20)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	山 美喜子					山 美喜子

教科書	『病理学概論』 医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	人体の正常構造と機能 日本医事新報社 病気がみえる

授業の方法及び内容	病理学の基礎的内容と、柔道整復師の業務や国家試験と関連の強い内容を重点的に解説する。
到達目標	病理学の柔道整復師にとっての重要性を理解すると同時に、国家試験の出題傾向を把握する。
準備学習の内容	授業と関連した内容の課題の提出、口頭試問
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎授業ごとに理解度の確認のための小テストを行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	1 病理学とは 解剖の種類 染色法 2 疾病の一般 病理学の用語
2	3 細胞傷害 退行性病変：代謝障害とは、萎縮（種類）、変性（分類）
3	3 細胞傷害 代謝障害と疾病 痛風、色素代謝異常、黄疸
4	3 細胞傷害 代謝障害と疾病 糖尿病（分類）
5	3 細胞傷害 糖尿病（合併症） 壊死とアポトーシス
6	4 循環障害 充血、うっ血（症状）、虚血、出血（分類）
7	4 循環障害 出血（出血性素因）、血栓症、塞栓症、梗塞
8	4 循環障害 浮腫の成因
9	期末試験
10	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	病理学概論 b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	後期	2年	(3)	60 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	山 美喜子					山 美喜子

教科書	『病理学概論』 医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	人体の正常構造と機能 日本医事新報社 病気がみえる

授業の方法及び内容	病理学の基礎的内容と、柔道整復師の業務や国家試験と関連の強い内容を重点的に解説する。
到達目標	病理学の柔道整復師にとっての重要性を理解すると同時に、国家試験の出題傾向を把握する。
準備学習の内容	授業と関連した内容の課題の提出、口頭試問
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎授業ごとに理解度の確認のための小テストを行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	5 進行性病変 肥大、過形成、再生（細胞の再生能力）
2	5 進行性病変 化生、肉芽組織の増殖（創傷（骨折）の治癒）
3	5 進行性病変 肉芽組織の増殖（異物の処理）、移植
4	6 炎症 炎症とは 原因 形態学的変化 炎症における循環障害①
5	6 炎症 炎症における循環障害② 炎症の分類①
6	6 炎症 炎症の分類②
7	7 免疫異常 自然免疫と獲得免疫、免疫担当細胞
8	7 免疫異常 抗体（働きと種類）、免疫不全
9	7 免疫異常 自己免疫疾患（代表的疾患）
10	7 免疫異常 アレルギーの分類
11	8 腫瘍 腫瘍細胞の特徴、腫瘍の良性と悪性、転移とは
12	8 腫瘍 発癌の原因、診断
13	8 腫瘍 組織学的分類
14	9 先天性異常 分類、遺伝子、染色体とは
15	9 先天性異常 遺伝性疾患（遺伝形式による分類、代表的疾患）
16	9 先天性異常 染色体異常（分類、代表的疾患）、胎児障害
17	10 病因 内因、外因（栄養障害、物理的外因）
18	10 病因 外因（化学的外因、生物学的外因（感染症））
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	リハビリテーション医学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	後期	2年	2	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	竹内 仁					竹内 仁

教科書	『リハビリテーション医学』 南江堂
参考文献・資料等	『標準リハビリテーション医学』

授業の方法及び内容	教科書を主として配布プリント、パワーポイントを使い、学生への質問も取り入れる。
到達目標	リハビリテーション医学の概略と実際に行われる評価、診断、治療について理解させ、柔道整復師の行う施術との関連を理解させる。
準備学習の内容	資料を用いた予習と復習
授業期間全体を通じた授業の進め方	医学的リハビリテーションについての理解を深めるため、実技を踏まえながら授業を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	リハビリテーションの概念と歴史 医学的リハビリテーションとその対象
2	リハビリテーション医学の基礎医学 運動学と機能解剖
3	リハビリテーション医学の基礎医学 障害学 治療学
4	リハビリテーション医学の評価と診断 身体計測 ROM測定 MMT
5	リハビリテーション医学の評価と診断 中枢性障害の評価法 小児運動発達の評価法
6	リハビリテーション医学の評価と診断 協調性テスト 失認と失行の評価法 心理評価
7	リハビリテーション医学の評価と診断 ADL 評価 電気生理学的診断法 画像診断
8	リハビリテーションの治療 理学療法 運動療法 物理療法
9	リハビリテーションの治療 理学療法 牽引 マッサージ
10	リハビリテーションの治療 作業療法 補装具 装具 義肢
11	リハビリテーションの治療 作業療法 補装具 移動補助具 自助具と介護機器
12	リハビリテーションの治療 言語療法 リハビリテーション医学と関連職種
13	リハビリテーションの実際 脳卒中 脊髄損傷
14	リハビリテーションの実際 小児疾患
15	リハビリテーションの実際 切断 末梢神経損傷
16	リハビリテーションの実際 関節リウマチ 整形外科疾患
17	リハビリテーションの実際 心疾患 呼吸器疾患
18	老人のリハビリテーション リハビリテーションと福祉
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	衛生学・公衆衛生学Ⅱ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期（前半）	2年	1	20
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	若山 葉子					若山 葉子

教科書	『衛生学・公衆衛生学』 南江堂
参考文献・資料等	国民衛生の動向 2023/2024 厚生労働統計協会

授業の方法及び内容	テキストを中心に、スライド・参考資料を用いて講義を行う。直近の公衆衛生的話題、社会の動向についても解説を加える。適宜小テスト等を実施し理解度を確認する。
到達目標	将来地域社会で保健・医療・福祉の一端を担うにふさわしい、公衆衛生的学識と教養を確実に身につけ、国家試験合格を目指す。自身の社会的役割・責任・貢献等について理解し考えを深める。
準備学習の内容	予定される授業内容のテキスト範囲に目を通し、授業展開の概要を把握する。他の基礎科目との関連についても理解しておく。保健・医療・福祉分野の社会的動向等について、種々のメディアを通して情報を把握しておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	一方向の知識・情報の伝達ではなく、双方向の意思疎通をはかり、学生の理解度を確認しながら進める。国家試験の動向・傾向を踏まえ、ポイントを示唆する。講義ごとに重要事項を各自まとめる。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	産業保健：職業病 労働災害 安全衛生対策（安全管理体制・健康診断） 雇用統計
2	母子保健：母子保健指標（乳児死亡率・周産期死亡率） 母子保健対策 母子保健法 母子保健施策
3	学校保健：学校保健管理（健康診断・感染症対策・学校環境） 児童生徒の健康と疾病異常 精神保健：主な精神疾患 医療 精神保健対策
4	地域保健と衛生行政：保健所の設置と事業 市町村保健センター 市町村の事業 地域保健活動の進め方：ポピュレーションアプローチ ハイリスクアプローチ PDCA サイクル
5	保健医療の制度：医療施設 医療保障制度（医療保険、公費医療） 介護保険制度 国民医療費：推移と現状 医療費内訳 財源別内訳
6	国際保健：国際保健協力 国際機関 WHO 各種国際条約 医療の倫理と安全確保：インフォームドコンセント 情報保護 医療機関の安全対策
7	疫学（1）：疫学の基本指標 人年法 疫学の効果指標 疫学の進め方 記述疫学 分析疫学（コホート研究・症例対照研究） 介入研究
8	疫学（2）：エビデンス 集団の把握 バイアスと交絡 因果関係 結果の評価
9	期末試験
10	試験解説 学期のまとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	職業倫理			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期（後半）	2年	1	20
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	竹内 仁					竹内 仁

教科書	『社会保障制度と柔道整復師の職業倫理』全国柔道整復学校協会 医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書、配布プリントを参照し、パワーポイントを用いて行う
到達目標	柔道整復師に必要な基本的倫理感と患者への対応
準備学習の内容	前回の復習を指示する
授業期間全体を通じた授業の進め方	教科書、配布プリントを参照して行う 積極的授業態度を期待し、学生への質問も行う

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	A	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	B	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	C	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	D	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	医療従事者の職業倫理とは
2	柔道整復師に必要な職業倫理感
3	医療従事者における守秘義務とインフォームドコンセント
4	柔道整復師の社会的責任と対応
5	柔道整復業界が抱える問題、柔道整復師の社会貢献と今後の課題
6	臨床現場トラブルケーススタディ 患者への対応 I、II
7	臨床現場トラブルケーススタディ 患者への対応 III、IV
8	医療における情報と責任
9	期末試験
10	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道Ⅱ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	実習	後期	2年	1	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝					水村 麻輝

教科書	
参考文献・資料等	(財)講道館 投の形 不昧堂出版 最新 柔道の形 全 柔道会 柔道叢書 岡崎屋書店 柔道大意

授業の方法及び内容	嘉納治五郎先生の歴史、柔道を表す言葉、柔道の礼節、正しい受身の行い方、講道館投の形(足技)までの習得を目的とし学んでいく。
到達目標	講道館投の形足技まで習得。約束乱取ができるまで学んでもらう。
準備学習の内容	準備体操、回旋運動、ストレッチ体操、前回授業の復習。
授業期間全体を通じた授業の進め方	実技を通して礼法、受身、形、乱取を行っていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点~80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点~70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点~60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点~0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	柔道衣の着方、マナーについて
2	礼法 柔道衣の着方
3	礼法 基本動作 後受身
4	礼法 基本動作 後受身 横受身
5	礼法 基本動作 後受身 横受身 前受身
6	受身の復習
7	認定実技の流れの説明
8	受身通しでの練習
9	中間試験
10	礼法 受身 手技
11	礼法 受身 手技
12	礼法 受身 手技
13	礼法 受身 手技
14	投の形通しで練習
15	礼法 受身 腰技
16	礼法 受身 腰技
17	試験前練習
18	期末試験
19	試験解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	社会保障制度			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期（前半）	2年	1	20
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	竹内 仁					竹内 仁

教科書	『社会保障制度と柔道整復師の職業倫理』全国柔道整復学校協会 医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書、配布プリントを参照し、説明する パワーポイントも活用する
到達目標	医療従事者として、医療保険制度、柔道整復療養費について学び、適正な療養費支給申請を理解する
準備学習の内容	前回の復習を指示する
授業期間全体を通じた授業の進め方	教科書、配布プリントを参照して行う 積極的授業態度を期待し、学生への質問も行う

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	A	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	B	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	C	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	D	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	社会保障制度とは 社会保障の3つの機能
2	公的年金制度の仕組み
3	介護保険の意義と仕組み
4	医療保険の概要
5	医療保険制度と柔道整復師
6	診療報酬制度 療養費とは
7	柔道整復師業務における療養費
8	療養費請求のケーススタディ
9	期末試験
10	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学Ⅱ—1			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	前期	2年	4	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂、『標準整形外科学』医学書院

授業の方法及び内容	座学での講義を主体とする。教科書で学び、プリントにまとめ、学習成果を国家試験過去問題にて確認する。「自分専用カスタマイズされた参考書を作る」ことを目標とする。
到達目標	下肢の損傷について、①分類②発生機所③症状④治療法⑤合併症を患者に説明できるようになる。また該当部位の、①骨(名称)②筋(起始・停止・作用)③神経(支配領域)を何も見ずに口述することができるようになる。
準備学習の内容	①該当範囲の解剖学(骨・筋・神経)の復習、②小試験対策、③授業予定範囲の教科書先読みを基本とした、自宅学習を習慣づける。
授業期間全体を通じた授業の進め方	単元毎に小試験を実施し、学習到達度を確認する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は16回以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画 臨床柔道整復学Ⅱ-1 (前期)

1	オリエンテーション (シラバス、授業の進め方、評価方法)
2	1-3. 下肢の骨折 A. 骨盤骨骨折 解剖と機能
3	1-3. 下肢の骨折 A. 骨盤骨骨折 1 骨盤骨単独骨折
4	1-3. 下肢の骨折 A. 骨盤骨骨折 2 骨盤骨輪骨折
5	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 解剖と機能
6	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 1 大腿骨近位端部骨折 (骨頭部骨折)
7	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 1 大腿骨近位端部骨折 (頸部骨折①)
8	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 1 大腿骨近位端部骨折 (頸部骨折②)
9	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 1 大腿骨近位端部骨折 (大転子骨折、小転子骨折)
10	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 1 大腿骨近位端部骨折 (まとめ)
11	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 2 大腿骨骨幹部骨折①
12	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 2 大腿骨骨幹部骨折②
13	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 3 大腿骨遠位端部骨折①
14	1-3. 下肢の骨折 B. 大腿骨骨折 3 大腿骨遠位端部骨折②
15	1-3. 下肢の骨折 C. 膝蓋骨骨折 解剖と機能
16	1-3. 下肢の骨折 C. 膝蓋骨骨折 膝蓋骨の骨折 1 膝蓋骨骨折
17	総合復習① 骨盤骨骨折、大腿骨骨折、膝蓋骨骨折
18	総合復習② 骨盤骨骨折、大腿骨骨折、膝蓋骨骨折
19	中間試験
20	解答および解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学Ⅱ—2			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	前期	2年	(4)	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂、『標準整形外科学』医学書院

授業の方法及び内容	座学での講義を主体とする。教科書で学び、プリントにまとめ、学習成果を国家試験過去問題にて確認する。「自分専用カスタマイズされた参考書を作る」ことを目標とする。
到達目標	下肢の損傷について、①分類②発生源③症状④治療法⑤合併症を患者に説明できるようになる。また該当部位の、①骨(名称)②筋(起始・停止・作用)③神経(支配領域)を何も見ずに口述することができるようになる。
準備学習の内容	①該当範囲の解剖学(骨・筋・神経)の復習、②小試験対策、③授業予定範囲の教科書先読みを基本とした、自宅学習を習慣づける。
授業期間全体を通じた授業の進め方	単元毎に小テストを実施し、学習到達度を確認する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は16回以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画 臨床柔道整復学Ⅱ-2 (前期)

1	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 解剖と機能
2	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 1下腿骨近位端部骨折①
3	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 1下腿骨近位端部骨折②
4	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 2下腿骨骨幹部骨折①
5	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 2下腿骨骨幹部骨折②
6	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 3下腿骨遠位端部骨折および足関節の脱臼骨折①
7	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 3下腿骨遠位端部骨折および足関節の脱臼骨折②
8	1-3. 下肢の骨折 D. 下腿骨骨折 3下腿骨遠位端部骨折および足関節の脱臼骨折③
9	1-3. 下肢の骨折 E. 足・足趾骨折 1足根骨骨折 (距骨骨折)
10	1-3. 下肢の骨折 E. 足・足趾骨折 1足根骨骨折 (踵骨骨折)
11	1-3. 下肢の骨折 E. 足・足趾骨折 1足根骨骨折 (舟状骨骨折・立方骨骨折・楔状骨骨折)
12	1-3. 下肢の骨折 E. 足・足趾骨折 解剖と機能
13	1-3. 下肢の骨折 E. 足・足趾骨折 2中足骨骨折①
14	1-3. 下肢の骨折 E. 足・足趾骨折 2中足骨骨折②
15	1-3. 下肢の骨折 E. 足・足趾骨折 3趾骨骨折
16	総合復習① 下腿骨骨折、足・足趾骨折
17	総合復習② 下腿骨骨折、足・足趾骨折
18	総合復習③ 下腿骨骨折、足・足趾骨折
19	期末試験
20	解答および解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学Ⅲ—1			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	2年	4	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂、『標準整形外科学』医学書院

授業の方法及び内容	座学での講義を主体とする。教科書で学び、プリントにまとめ、学習成果を国家試験過去問題にて確認する。「自分専用カスタマイズされた参考書を作る」ことを目標とする。
到達目標	下肢の損傷について、①分類②発生源③症状④治療法⑤合併症を患者に説明できるようになる。また該当部位の、①骨(名称)②筋(起始・停止・作用)③神経(支配領域)を何も見ずに口述することができるようになる。
準備学習の内容	①該当範囲の解剖学(骨・筋・神経)の復習、②小試験対策、③授業予定範囲の教科書先読みを基本とした、自宅学習を習慣づける。
授業期間全体を通じた授業の進め方	単元毎に小テストを実施し、学習到達度を確認する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は16回以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画 臨床柔道整復学Ⅲ-1（後期）

1	オリエンテーション（シラバス、授業の進め方、評価方法）
2	2-3. 下肢の脱臼 A. 股関節脱臼 1 後方脱臼
3	2-3. 下肢の脱臼 A. 股関節脱臼 2 前方脱臼
4	2-3. 下肢の脱臼 A. 股関節脱臼 3 中心性脱臼
5	2-3. 下肢の脱臼 B. 膝蓋骨脱臼 1 側方脱臼（外側脱臼）①
6	2-3. 下肢の脱臼 B. 膝蓋骨脱臼 1 側方脱臼（外側脱臼）②
7	2-3. 下肢の脱臼 C. 膝関節脱臼①
8	2-3. 下肢の脱臼 C. 膝関節脱臼②（それに伴う複合靭帯損傷）
9	2-3. 下肢の脱臼 D. 足部の脱臼 解剖と機能
10	2-3. 下肢の脱臼 D. 足部の脱臼 1 横足根関節（シヨパール関節）損傷
11	2-3. 下肢の脱臼 D. 足部の脱臼 2 足根中足関節（リスフラン関節）損傷
12	2-3. 下肢の脱臼 D. 足部の脱臼 3 中足趾節関節、趾節間関節の脱臼
13	3-3. 下肢の軟部組織損傷 A. 股関節の軟部組織損傷 1 鼠径部痛症候群 2 股関節唇損傷
14	3-3. 下肢の軟部組織損傷 A. 股関節の軟部組織損傷 3 弾発股 4 梨状筋症候群 5 その他
15	3-3. 下肢の軟部組織損傷 B. 大腿部の軟部組織損傷 1 大腿部打撲 2 大腿部肉離れ
16	総合復習① 股関節脱臼、膝蓋骨脱臼、膝関節脱臼、足部の脱臼
17	総合復習② 股関節脱臼、膝蓋骨脱臼、膝関節脱臼、足部の脱臼
18	総合復習③ 股関節の軟部組織損傷、大腿部の軟部組織損傷
19	中間試験
20	解答および解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学Ⅲ—2			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	2年	(4)	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂、『標準整形外科学』医学書院

授業の方法及び内容	座学での講義を主体とする。教科書で学び、プリントにまとめ、学習成果を国家試験過去問題にて確認する。「自分専用カスタマイズされた参考書を作る」ことを目標とする。
到達目標	下肢の損傷について、①分類②発生源③症状④治療法⑤合併症を患者に説明できるようになる。また該当部位の、①骨(名称)②筋(起始・停止・作用)③神経(支配領域)を何も見ずに口述することができるようになる。
準備学習の内容	①該当範囲の解剖学(骨・筋・神経)の復習、②小試験対策、③授業予定範囲の教科書先読みを基本とした、自宅学習を習慣づける。
授業期間全体を通じた授業の進め方	単元毎に小テストを実施し、学習到達度を確認する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は16回以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画 臨床柔道整復学Ⅲ-2（後期）

1	3-3. 下肢の軟部組織損傷 C. 膝関節部の軟部組織損傷 機能と解剖
2	3-3. 下肢の軟部組織損傷 C. 膝関節部の軟部組織損傷 1半月板損傷
3	3-3. 下肢の軟部組織損傷 C. 膝関節部の軟部組織損傷 2靭帯損傷
4	3-3. 下肢の軟部組織損傷 C. 膝関節部の軟部組織損傷 3発育期の膝関節障害 4腸脛靭帯炎
5	3-3. 下肢の軟部組織損傷 C. 膝関節部の軟部組織損傷 5鷲足炎 6膝蓋大腿関節障害
6	3-3. 下肢の軟部組織損傷 C. 膝関節部の軟部組織損傷 7膝周辺の関節包、滑液包の異常 8神経の障害
7	3-3. 下肢の軟部組織損傷 D. 下腿部の軟部組織損傷 1アキレス腱炎、アキレス腱周囲炎 2アキレス腱断裂
8	3-3. 下肢の軟部組織損傷 D. 下腿部の軟部組織損傷 3下腿三頭筋の肉離れ 4下腿部のスポーツ障害
9	3-3. 下肢の軟部組織損傷 E. 1足関節捻挫
10	3-3. 下肢の軟部組織損傷 E. 2足関節捻挫の類症鑑別
11	3-3. 下肢の軟部組織損傷 F. 足・足趾の軟部組織損傷 1中足部から後足部の有痛性疾患
12	3-3. 下肢の軟部組織損傷 F. 足・足趾の軟部組織損傷 2前足部の有痛性疾患
13	3-3. 下肢の軟部組織損傷 F. 足・足趾の軟部組織損傷 3扁平足障害
14	総合復習 1-3. 下肢の骨折①
15	総合復習 1-3. 下肢の骨折②
16	総合復習 2-3. 下肢の脱臼
17	総合復習 3-3. 下肢の軟部組織損傷①
18	総合復習 3-3. 下肢の軟部組織損傷②
19	期末試験
20	解答および解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅱa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	前期	2年	2	60(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	秋本 寛			接骨院等勤務：12年11か月 専門学校勤務：0年1か月		秋本 寛

教科書	『柔道整復学・実技編』『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	1. 上肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。 2. 下肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。
準備学習の内容	1. 上肢の機能と解剖を理解できる。 2. 下肢の機能と解剖を理解できる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	ガイダンスと前年復習
2	チャーリーホース診察
3	チャーリーホース検査
4	チャーリーホース診察から検査まで
5	チャーリーホースの RICE 処置・大腿四頭筋肉離れ
6	ハムストリングス肉離れ診察
7	ハムストリングス肉離れ検査
8	ハムストリングス肉離れ診察から検査まで
9	ハムストリングス肉離れ治療（テープ固定と弾性包帯による圧迫、免荷歩行）
10	半月板損傷診察
11	半月板損傷検査
12	半月板損傷診察から検査
13	側副靭帯損傷診察
14	側副靭帯損傷検査
15	側副靭帯損傷診察から検査
16	試験前復習
17	期末試験前半
18	期末試験後半
19	側副靭帯損傷固定（テープ固定・ギプスシャーレ）
20	総括

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅱb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期（前半）	2年	(2)	60 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	秋本 寛			接骨院等勤務：12年11か月 専門学校勤務：0年1か月		秋本 寛

教科書	『柔道整復学・実技編』『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	3. 上肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。 4. 下肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。
準備学習の内容	3. 上肢の機能と解剖を理解できる。 4. 下肢の機能と解剖を理解できる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	前十字靭帯損傷診察
2	前十字靭帯損傷検査
3	前十字靭帯損傷診察から検査
4	テニスレッグ診察
5	テニスレッグ検査
6	テニスレッグ固定
7	試験前復習
8	試験前復習 2
9	期末試験（筆記試験）
10	その他の外傷

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅲa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	前期	2年	2	60(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝			接骨院等勤務：5年7か月 専門学校勤務：4年2か月		水村 麻輝

教科書	『柔道整復学・実技編』『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	5. 上肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。 6. 下肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。
準備学習の内容	5. 上肢の機能と解剖を理解できる。 6. 下肢の機能と解剖を理解できる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	オリエンテーション 1年時の復習
2	鎖骨骨折 整復 固定復習 認定実技の流れの確認
3	肩関節前方脱臼 整復 固定
4	肘関節前方脱臼 整復 固定
5	肘内障 整復 内側側副靭帯 野球肘の診察
6	PIP 関節背側脱臼 固定
7	ボクサー骨折 固定
8	指の固定練習
9	腱板損傷 検査 診察①
10	中間試験
11	腱板損傷 検査 診察②
12	上腕二頭筋長頭腱損傷 検査 診察①
13	上腕二頭筋長頭腱損傷 検査 診察②
14	上腕骨外科頸骨折 整復①
15	上腕骨外科頸骨折 整復②
16	上腕骨骨幹部骨折固定
17	試験前復習
18	期末試験
19	解答解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅲb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期（前半）	2年	(2)	60 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝			接骨院等勤務：5年7か月 専門学校勤務：4年2か月		水村 麻輝

教科書	『柔道整復学・実技編』『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	7. 上肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。 8. 下肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。
準備学習の内容	7. 上肢の機能と解剖を理解できる。 8. 下肢の機能と解剖を理解できる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	橈骨遠位端部骨折 診察 整復①
2	橈骨遠位端部骨折 診察 整復②
3	橈骨遠位端部骨折 固定①
4	橈骨遠位端部骨折 固定②
5	上肢軟部組織損傷 復習
6	上肢骨折 診察 整復 固定復習
7	上肢脱臼 診察 整復 固定復習
8	期末試験
9	解答解説
10	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技IV-1			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期（後半）	2年	2	60（20）
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	秋本 寛			接骨院等勤務：12年11か月 専門学校勤務：0年1か月		秋本 寛

教科書	『柔道整復学・実技編』『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	9. 上肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。 10. 下肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。
準備学習の内容	9. 上肢の機能と解剖を理解できる。 10. 下肢の機能と解剖を理解できる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	足関節捻挫診察
2	足関節捻挫検査
3	足関節捻挫治療
4	下腿骨骨幹部骨折固定
5	アキレス腱断裂固定
6	試験前復習
7	期末試験前半
8	期末試験後半
9	その他の外傷
10	総括

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技IV-2			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期（後半）	2年	(2)	60 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	秋本 寛			接骨院等勤務：12年11か月 専門学校勤務：0年1か月		秋本 寛

教科書	『柔道整復学・実技編』『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	11. 上肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。 12. 下肢の骨折・脱臼・軟部組織損傷について、診察・整復法・固定法・検査法が出来る。
準備学習の内容	11. 上肢の機能と解剖を理解できる。 12. 下肢の機能と解剖を理解できる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	上肢骨折
2	上肢脱臼
3	上肢軟損
4	肋骨骨折
5	下肢軟損
6	下肢軟損
7	包帯固定学
8	総復習
9	期末試験
10	総括

授業計画書

お基本情報	科目名称	柔道整復実技Ⅳ-3			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期（後半）	2年	(2)	60 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝			接骨院等勤務：5年7か月 専門学校勤務：4年2か月		秋本 寛

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂、『標準整形外科学』医学書院

授業の方法及び内容	柔道整復理論でポイントを確認後に実技に移る。各外傷の診察方法や徒手検査法、整復および固定法を臨床での動きを想定して繰り返し実習する。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 各外傷の特徴や施術方法について、患者に説明して同意を得ることができる。 医療現場で通用する実践的なスキルを身に付ける。
準備学習の内容	該当範囲の解剖学（骨・筋・神経）の復習、授業範囲の教科書先読みを習慣づける。
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループロールプレイングを中心とする。2人1組で診察方法や徒手検査法の実施、次に4人1組で助手2名を使ったより実践的な実習を行う。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画 柔道整復実技IV-3 (後期後半)

1	触診について
2	肋骨骨折 固定①
3	肋骨骨折 固定②
4	上肢骨折 復習
5	上肢脱臼 復習
6	上肢軟損 復習
7	総復習
8	期末試験
9	解答解説
10	総合復習

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床実習Ⅱ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	前期	2年	1	45
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』 南江堂
参考文献・資料等	臨床実習ガイドライン

授業の方法及び内容	講義は実習形式で臨床実習指導者の指示に従って実施する。臨床実習Ⅰの評価項目の精度を上げると共に、新たに加わった到達目標を達成する。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・医療面接（問診）と身体診察（触診など）の手順が説明できる。 ・ROM、MMTなどの計測、評価を説明できる。 ・各種徒手検査、各反射検査などの評価を説明できる。 ・物理療法機器の効果と適応と禁忌が説明できる。 ・患者誘導ができる。 ・施術録の項目を説明できる。 ・巻軸包帯での被覆包帯が緩まない包帯・腫脹の変化に対応できる包帯の技術習得・固定包帯は骨折等の整復位をいかに保持するかを説明できる。 ・患部の運動制限・疼痛緩和・血行障害の予防などの技術を説明できる。 ・臨床現場を通して、これからの自分の学習目標を知ることができる。
準備学習の内容	個別の学習目標を設定した上で、達成するための具体的なプランを立案する。また、修学範囲の復習を事前に行い、実際の臨床実習現場で対応できるように準備しておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	臨床実習指導者の指示に従って行動し、内容は毎日デイリーノートに記録する。中間および最終日に自己評価を行い学習目標の到達度を確認する。実習終了後には、実習終了後の振り返り、症例報告と共に期限までに提出する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	学外 見学型臨床実習①
2	学外 見学型臨床実習②
3	学外 見学型臨床実習③
4	学外 見学型臨床実習④
5	学外 見学型臨床実習⑤
6	学外 見学型臨床実習⑥
7	学外 見学型臨床実習⑦
8	学外 見学型臨床実習⑧
9	学外 見学型臨床実習⑨
10	学外 見学型臨床実習⑩
11	学外 見学型臨床実習⑪
12	学外 見学型臨床実習⑫
13	学外 見学型臨床実習⑬
14	学外 見学型臨床実習⑭
15	学外 見学型臨床実習⑮
16	学外 見学型臨床実習⑯
17	学外 見学型臨床実習⑰
18	学外 見学型臨床実習⑱
19	学外 見学型臨床実習⑲
20	学外 見学型臨床実習⑳
21	学外 見学型臨床実習㉑
22	学外 見学型臨床実習㉒
23	学外 見学型臨床実習㉓

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床実習Ⅲ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	前期	2年	1	45
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	臨床実習ガイドライン

授業の方法及び内容	講義は実習形式で臨床実習指導者の指示に従って実施する。臨床実習Ⅱの評価項目の精度を上げると共に、新たに加わった到達目標を達成する。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的な責任・指名を自覚し柔道整復師の倫理綱領に則った行動ができる。 ・損傷の原因や状態を把握し、業務範囲、適応の判断ができる。 ・超音波診断装置やレントゲン像などを理解し、読影ができる。 ・医科受診の判断や受診のための紹介、返書等の対応について理解できる。 ・医科受診前の応急的な整復・固定について説明できる。 ・各種リスクマネージメントを説明できる。 ・観察結果から施術方針や施術計画を立案できる。 ・施術の説明・計画・方法を患者に説明し患者の同意が得られる。 ・骨折・脱臼の整復技術、軟部組織損傷の初期処置法などを習得している。 ・後療法の種類と特徴及び適応と禁忌を説明し、正しく各運動療法を行うことができる。
準備学習の内容	個別の学習目標を設定した上で、達成するための具体的なプランを立案する。また、修学範囲の復習を事前に行い、実際の臨床実習現場で対応できるように準備しておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	臨床実習指導者の指示に従って行動し、内容は毎日デイリーノートに記録する。中間および最終日に自己評価を行い学習目標の到達度を確認する。実習終了後には、実習終了後の振り返り、症例報告と共に期限までに提出する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	学外 参加型臨床実習①
2	学外 参加型臨床実習②
3	学外 参加型臨床実習③
4	学外 参加型臨床実習④
5	学外 参加型臨床実習⑤
6	学外 参加型臨床実習⑥
7	学外 参加型臨床実習⑦
8	学外 参加型臨床実習⑧
9	学外 参加型臨床実習⑨
10	学外 参加型臨床実習⑩
11	学外 参加型臨床実習⑪
12	学外 参加型臨床実習⑫
13	学外 参加型臨床実習⑬
14	学外 参加型臨床実習⑭
15	学外 参加型臨床実習⑮
16	学外 参加型臨床実習⑯
17	学外 参加型臨床実習⑰
18	学外 参加型臨床実習⑱
19	学外 参加型臨床実習⑲
20	学外 参加型臨床実習⑳
21	学外 参加型臨床実習㉑
22	学外 参加型臨床実習㉒
23	学外 参加型臨床実習㉓